

介護技術講習会の意義と課題－受講生の意識調査より－

Meaning and problem of social care skill training
－Analysis based on questionnaires survey to participants－

丸 山 順 子

Junko MARUYAMA

尾 台 安 子

Yasuko ODAI

要 旨

本研究は、今年度から実施した介護技術講習会の意義と課題を受講生の意識調査から検討した。長野県では、各養成校と介護福祉士会とが連携し、長野県介護技術講習会事業部を組織した。全国でも例のない組織作りを本校が主幹校として中心に行い、655名の修了認定者を輩出した。受講者にアンケート調査を行った結果、受講して介護に対する意識の変化があったことがわかった。「介護過程の展開」では、介護技術は、日々の実践が一人ひとりの介護目標につながっているものであるという認識が高まった。また、「コミュニケーション技術」でもその重要性が認識された。さらに「移動の介護」等で根拠のある技術の重要性が認識された。講習会全体を通して、「大変満足」と「おおよそ満足」を合わせると93.2%に及んだ。これらのことから、私たちが研修を重ねて行ってきた意義は、受講生に認識されたと考えられる。今後の課題は、更なる研修を重ね、質の高い講習会にしていこうことである。また、少人数で、より細やかな指導ができる講習会の体制づくり、受講生の継続教育の必要性が考えられた。

キーワード 介護技術講習会、意識の変化、満足度

はじめに

介護福祉士の国家資格取得者は、養成校卒業生と実務者の国家試験合格者に大別される。平成17年現在、養成校卒業生は、185,675名、国家試験合格者は、281,998名である¹⁾。今後、ホームヘルパーを廃止し、介護福祉士国家資格者の一本化を図る方向性が示されたこともあり、国家試験受験者は急増した。介護福祉士国家受験は、筆記試験と実技試験があり、両方とも合格しないと取得できない。この国家試験受験者の急増により、実技試験の実施体制や受講生の質の向上が課題として挙げられ、平成16年10月にこれらの理由を改正の趣旨として介護技術講習会が導入された²⁾。介護福祉士の国家資格については、養成校が責務を負っているため、この講習会の実施者は養成校でなければならない。今年度より養成校独自で行う介護技術講習会を、全国的には例のない県単位の介護技術講習会として長野県内の養成校と介護福祉士会が連携し、本校が幹事校として行なった経過は、先の「長野県介護技術講習会への取り組みと今後の課題」で述べたとおりである³⁾。

そこで、介護技術講習会の意義と課題を探ることを目的とし、受講生から、介護技術講習会を受講しての介護に対する意識の変化や講習会への意見についてアンケート調査することにより検討した。

1. 長野県介護技術講習会の概要と実際

(1) 介護技術講習会の概要

介護講習会では、最大で受講生40名までと規定があり、受講生8人に対して1人以上の指導者をつけて指導に当たらなければならない。各養成校2～4回開催し、長野県養成校全体で18回、655名が受講した。

受講時間数は、32時間と規定され、1日8時間で9時～18時までの4日間を受講する(表1)。受講科目は、「介護過程の展開」「コミュニケーション技術」「移動の介護」「衣服の着脱の介護」「排泄の介護」「食事の介護」「入浴の介護」の項目であり、講義を受けては2事例の課題演習を行なうようになっている。受講生は12課題の演習を行なうことになる。4日目は、「介護過程の展開」の演習で、各自、事例をまとめて持ち寄り、事例検討を行う。最終的に総合評価として修了認定試験を実施する。この講習会は国家試験の実技試験に代わるものでもあるため、公平な評価ができるよう配慮しなければならない。

指導体制は、統括主任指導者1名、受講者8名につき指導者1名を配置し実施した。統括主任指導者が、各講習会の責任者として細かなスケジュールを立て、計画・運営を行なった(表2)。

表1. 介護技術講習会日程表の一例

	項 目
1 日 目	介護過程の展開(講義2.5h)
	コミュニケーション技術(講義1h・演習1.5h)
	移動の介助等(講義1h・演習2h)
2 日 目	衣服の着脱の介助等(講義1h・演習2.5h)
	排泄の介助等(講義1h・演習4h)
3 日 目	食事の介助等(講義1h・演習2.5h)
	入浴の介助等(講義1h・演習4h)
4 日 目	介護過程の展開(演習3.5h)
	総合評価(3.5h)
合計	32h

表2. 介護技術講習会スケジュールの一例（主任指導者・指導者用）

< 2日目 >

月 日 () 305教室、実習室使用

8:30～	受付
9:00～9:10	前回の復習 演習担当；1 G（指導者2）2 G（指導者3） 3 G（指導者4）4 G（指導者5）5 G（指導者1）
9:10～9:30	移動事例Bをグループ毎に演習
9:30～9:40	事例B模範演技（介護者；指導者1 モデル；指導者2 解説；指導者3）
9:40～10:00	グループ毎演習・まとめ
10:10～10:50	衣服の着脱 演習準備 <衣服着脱の講義>
10:50～11:00	模範演技 *仰臥位での着脱（介護者；統括主任指導者 モデル；指導者4）
11:00～11:10	衣服の着脱A事例模範演技（介護者；指導者5 モデル；指導者1 解説；指導者2）
11:10～11:50	グループ毎演習
11:50～12:00	まとめ
	（ 昼 食 ）
12:50～13:10	衣服の着脱B事例 グループ毎演習
13:10～13:20	事例B模範演技（介護者；指導者3 モデル；指導者4 解説；指導者5）
13:20～14:10	事例B グループ毎演習
14:20～15:10	排泄の演習準備 <排泄の講義>
15:20～15:30	排泄の事例A模範演技（介護者；指導者1 モデル；指導者2 解説；指導者3）
15:30～16:40	グループ毎演習
16:45～17:10	排泄の事例B グループ毎演習
17:10～17:20	排泄の事例B模範演技（介護者；指導者4 モデル；指導者5 解説；指導者6）
17:20～17:55	グループ毎演習
17:55～18:10	2日目のまとめ（総括主任指導者；指導者コメント）

(2) 長野県介護技術講習会の実際

この講習会を開催するにあたり、長野県介護技術講習会事業部は、数回の研修会を重ね、独自に指導案と指導マニュアルを作成し、講義・演習内容を確認した。特に、演習については模擬演技を行い、受講生8人単位で指導を行うために、手技の統一やポイントの確認を行った。統一した認識と指導内容を確認して、講習会に臨んだ。

介護技術講習会のねらいとして「介護技術講習を通じて、受講者が介護技術の基礎を再確認しその技術を評価することによって、受講者の介護技術の向上を図るために行うことを十分に理解させる。」ことであった⁴⁾。

「介護過程の展開」では、「介護福祉士は、利用者の生活機能を全人的に把握し、生活機能の向上・改善を目指す介護の実践の重要性が受講生に理解できるようにする」ことをICF（国際生

活機能分類)の考え方をうい講義を初日に行った。また、演習では、4日目に受講生自身で事例をまとめ持ち寄り、ケアカンファレンスを行った。さらに、各単元で2事例を展開するにあたり、日々の介護実践は、一人ひとりの介護目標につながっていることを意識することを講習会全体に渡り強調して行っていた。

「コミュニケーション技術」は、対人サービスの基本として初日に行うことにした。講習会全体を通し、利用者の意思を尊重し、より良い人間関係の上に介護実践が提供できるように行った。特に、演習の模擬演技では意識的に、より実践的にいき、演習の指導にあたった。

「移動の介護」は、さまざまな生活行為の基本であるので初日に行うことにした。指導者は、講習会全体に渡り、受講生に動作一つ一つに原理や根拠があることを示し、これらの基本を繰り返し確実にやっていくことを指導することを確認した。そのために、テキストの演習内容のほかに、起き上がり、立ち上がり等の基本動作を独自に演習に取り入れるなどの工夫を行った。

「排泄の介護」は、人間らしく、気持ちよく排泄できるように、相手に対する精神的な配慮を強調して行った。誰にも見られずに自分なりの方法で清潔なトイレで排泄を済ませることが、誰もの願いとして再確認した。演習では、そのような配慮をしながら、ベッド上の便器使用とポータブルトイレへの移乗の介護を行った。

「衣服の着脱の介護」は、人と環境との関係が大きく影響されることや自己選択・自己表現をすることで精神的満足感を得ることを強調した。日ごろ頻回に行っている援助だけに、コミュニケーションをベースとして、根拠のある援助を行った。

「食事の介護」は、健康維持のみでなく、日常生活において、楽しみや生きがいにつながることを意識した。演習では、コミュニケーションによる自己選択や自立を促す援助を行った。

「入浴の援助」は、意義や個別性・プライバシーの配慮や自立支援・安全確保を強調して行った。演習では、一連の入浴動作を行うことにより、総ての技術の復習を行った。また、実際に足浴を行うことにより、利用者に快適な援助を提供することを実感させた。

2. 研究方法

(1) 調査対象；長野県介護技術講習会に受講した655名である。現場経験があるとしてアンケートを作成したために高校生の36名を除いた。また、6名再受講者についても、終了した時点の意識変化を問いたかったため625名をアンケートの調査対象とした。

(2) 調査方法；質問紙によるアンケート調査を実施した。アンケートは、講習会の4日目の最終日に一斉に行い、その場で回収した。質問内容は、年齢、所属、介護従事年数、受講後の意識変化、参考になった単元、受講後の満足感、習得したい知識を問うものだった。

3. 結果

長野県介護技術講習会の受講生対象数625名で回答者は597名であり、回答率は95.6%であった。

(1) 受講生の特性と受講の動機

受講生の特性として、年齢構成は、30歳代22.8%、子育てが落ち着き、手に職を求める再就職の世代である40～60歳代は63.9%でかなり多かった(表3)。介護職としての従事年数は、国家試験受験資格のある3～5年未満は59.5%、5～7年未満は16.8%と多かった。今年度は、国家試験の受験資格の有無は問わなくて良いことから3年未満が15.6%を占めた(表4)。来年

度は、国家試験の受験資格のある人に限られることになった。現在の所属先は、訪問介護事業所29.0%、特別養護老人ホーム24.1%、老人保健施設16.8%を示し、在宅・施設職員がほとんどであった（表5）。介護技術講習会を受けた動機は、「専門職として国家資格なのでしっかり学びたいから」70.9%が最も多かった（図1）。介護技術講習会の日程調整は、「全く問題なし」「ほぼ問題なし」が80%以上を占めていた（図2）。ほとんどの受講生が、職場に理解を求め、了解を得ていたと思われる。

表3. 受講者の年齢構成

年 齢	人数	%
20代	102	17.1
30代	136	22.8
40代	210	35.2
50代	158	26.5
60代	13	2.2
未記入	2	0.3

表4. 受講生の介護職従事年数

年 数	人数	%
3年未満	93	15.6
3～5年	355	59.5
5～7年	100	16.8
7～9年	29	4.9
10年以上	20	3.4
未記入	14	2.3

表5. 受講生の所属先

所 属 先	人数	%
訪問介護事業所	173	29.0
特別養護老人ホーム	144	24.1
老人保健施設	100	16.8
身体障害者療護施設	11	1.8
知的障害者施設	8	1.3
その他	147	24.6
なし	15	2.5

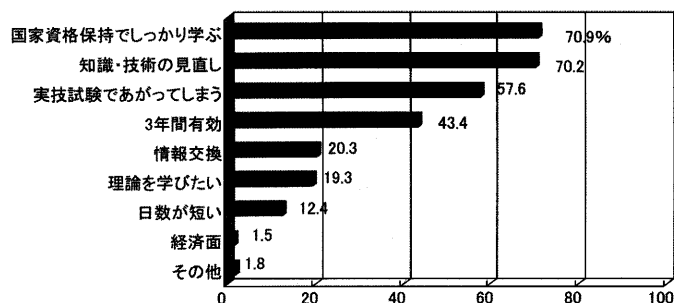


図1 介護技術講習会の受講動機

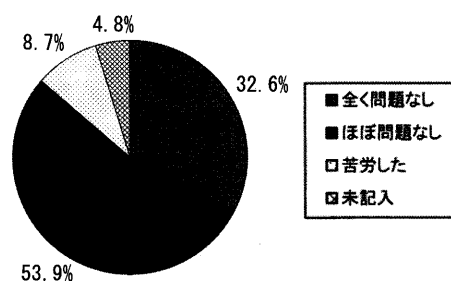


図2 受講生の日程調整

(2) 介護技術講習会による意識の変化

介護技術講習会を受講して、自分の介護に対する意識の変化については、大変あった79.7%、少しあった17.6%、あまりなかった1.0%、全くなかった0.8%であった(図3)。受講した結果何らかの意識変化をきたしたものが大半であり、変化のなかったものはわずかであった。

その意識の変化の具体的内容では、複数回答とした。12の課題演習では、コミュニケーションが常に入り、利用者の意思の確認や説明を行なうことや目線の位置に至るまでを指導のポイントとし、強調したことから、84.4%の受講生がコミュニケーションの重要性が意識され、47.6%の受講生は、言葉遣いが丁寧になったと回答した。そして、利用者主体の介護実践をしていかなければならないと意識を新たにもつことが出来た受講生は63.3%であり、日々の介護実践が一人ひとりの介護目標につながらなければならぬと意識付けできた受講生は57.6%である。介護過程の展開から始まり、12課題を介護目標と介護技術につなげて実施してきたので多くの受講生にその重要性が認識できた。さらに、介護技術はテクニックだけでなく、根拠をもっていなければならぬと思った受講生は52.8%、基本原則の重要性がわかった受講生は52.4%であり、動作一つ一つに根拠付けをし、指導した結果、受講生の意識化につながった。現場でいつも行なっていることなので変わりがなかったと思った受講生は1.7%、理想的なことを学んだが、現場に戻ったらとても無理であると思った受講生は18.1%であった(図4)。現場の介護量・質とのギャップが、意識変化をもたらさなかったと思われる。

参考になった単元は、多い順に「移動の介護」77.7%、「コミュニケーション技術」69.3%、「介護過程の展開」54.1%であった。いずれも、初日から最終日まで、徹底して行ってきた内容が多かった。「入浴の介護」33.3%、「食事の介護」36.3%であった(図5)。また、参考にならなかった単元は、「入浴の介護」6.9%、「食事の介護」5.4%、「排泄の介護」5.2%であった(図6)。課題内容が、差便器の使用やコミュニケーションによる食事の選択など受講生の習得したいニーズに合わなかったのではないかとと思われる。

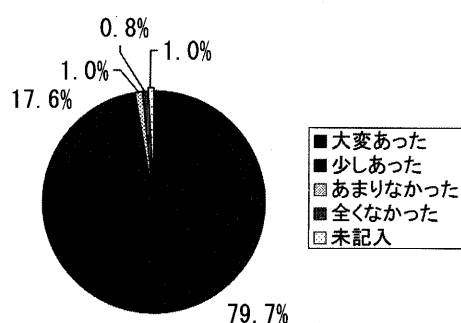


図3 受講後の介護に対する意識の変化

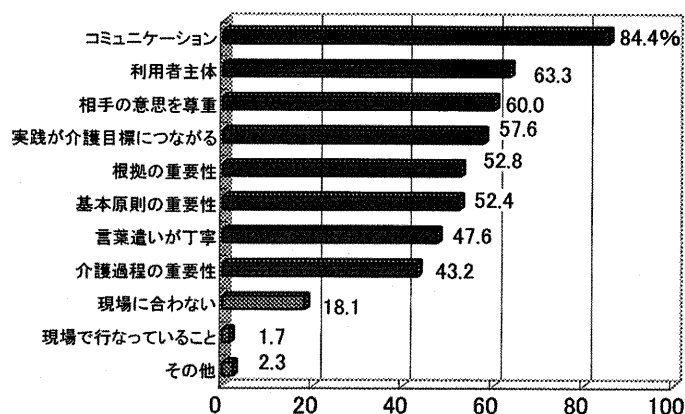


図4 受講後の意識の変化

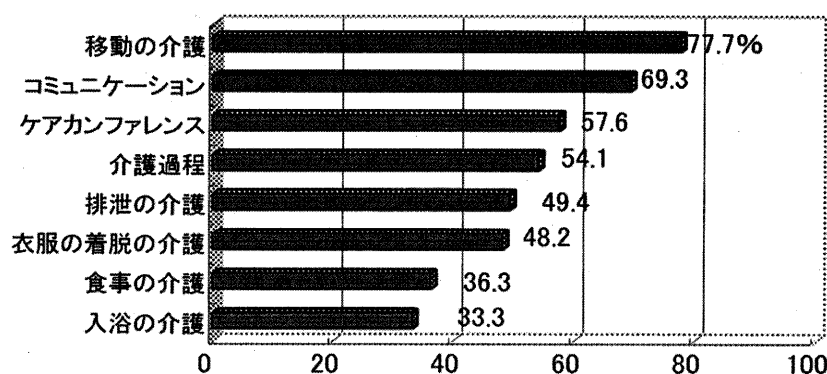


図5 参考になった単元

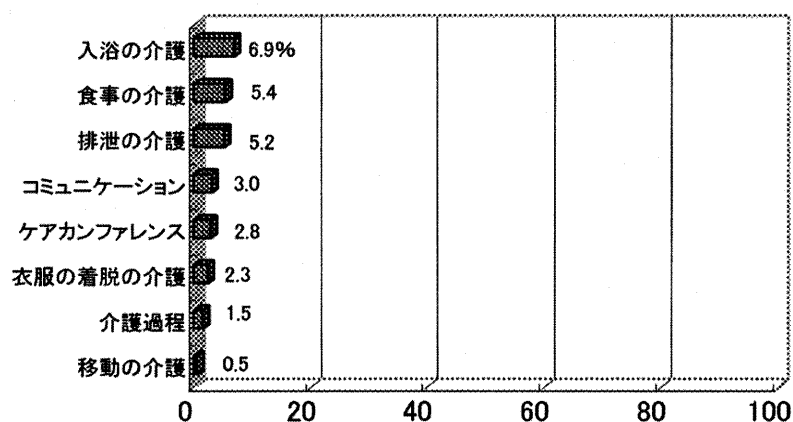


図6 参考にならなかった単元

(3) 介護技術講習会の満足度

全体的にこの介護技術講習会を受講しての満足度は、「大変満足」46.5%、「おおよそ満足」46.7%、合わせて93.2%の受講生が満足感を得ている。「やや不満足」4.7%、「大変不満足」0.5%であった(図7)。

自由記載は、「大変満足」「おおよそ満足」と回答した中では「講師の先生方が丁寧・熱心・親切で、不安や疑問に気軽に質問できた。」が一番多く、講義や演習は、どの会場も熱心に行われたことから受講生と指導者の気持ちの相乗効果があったと思われる。「ICFについて理解が深められた。」「コミュニケーションの大切さについて学んだ。」「基本が学べた。基本の原理原則を学べた。自己選択、自己決定、自立支援の大切さを学んだ。」「根拠の大切さを学んだ。」「介護技術の細やかな部分まで学べた。」と今回の指導のポイントが意識できたことも記載されていた。「日常の中で忘れかけたことを学べた。」「講義もわかりやすかった。」「演習が充実していた。」「他の職場の方との情報交換ができた。」といった感想もあった。

一方、「やや不満足」「大変不満足」では、「演習の時間がもう少し欲しい。」が多く、意欲的な思いが不満につながったと思われる。「ICFについて、もう少し時間をかけて欲しいし、まとめてくるのは負担であった。」「毎回違う講師で、介護の仕方も少し違い混乱した。指導を統一して欲しかった。」「一日の中で事例が多すぎる。スケジュールがハードである。」「金額が高い。」「4人に1人の講師がいれば良かった。」など少数であるがこのような意見もあった。

(4) 受講生が求めている知識・技術

受講生の大半は現場で介護業務についている人達である。現場で必要としていて習得したい知識や技術について調べてみた。その結果、日ごろ習得したい知識・技術として、「病気や症状」では、「認知症」66.7%、「失語症」40.4%、感染症は、「MRSA」45.1%、「医療行為に関する知識」は、「吸引」40.2%、「褥瘡」36.9%であった。また、日常生活の介護技術は、「認知症の対応技術」68.2%、「褥瘡予防」40.9%、他に、「ターミナルケア」47.6%であった（図8，9，10，11，12）。医療に関する知識が多く、特に認知症に関する知識や対応について習得したい受講生が多かった。また、ターミナルケアやリスクマネジメントなど突発的な対応や予測を必要とする対応も習得したいと多くの受講生が思っていた。

図7 介護後術講習会の満足度

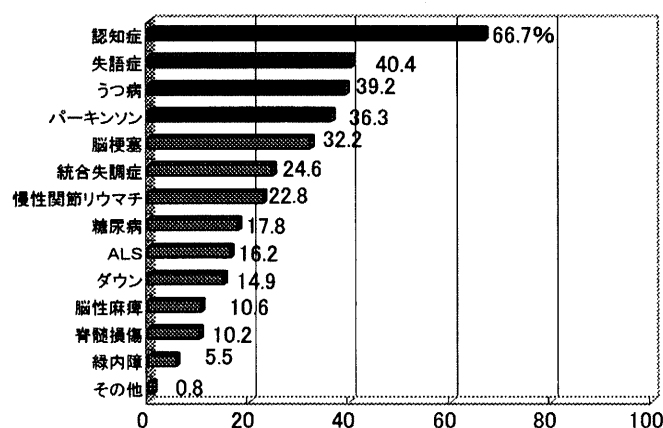
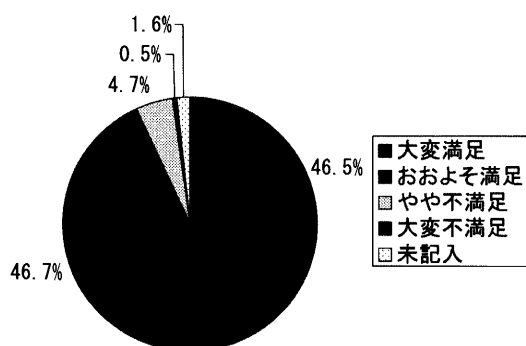


図8 習得したい知識(病気や症状)

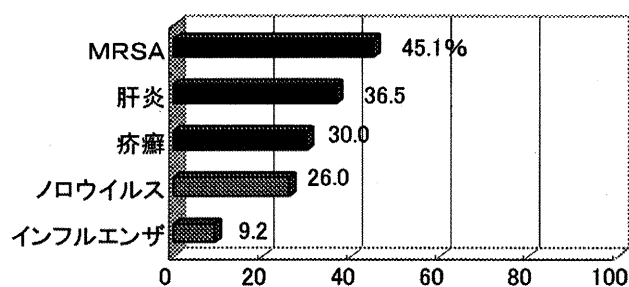


図9 習得したい知識(感染症)

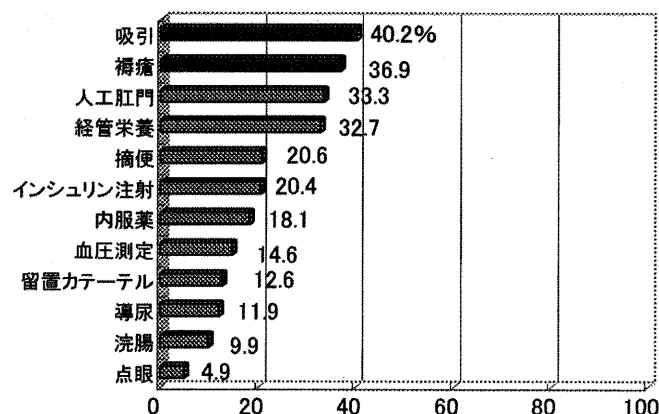


図10 習得したい知識(医療に関する知識)

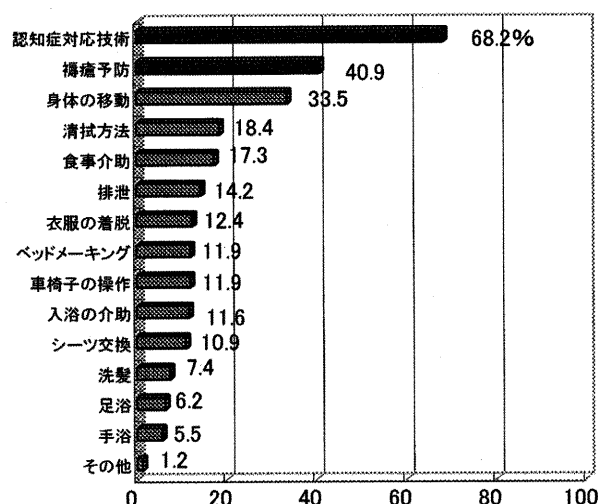
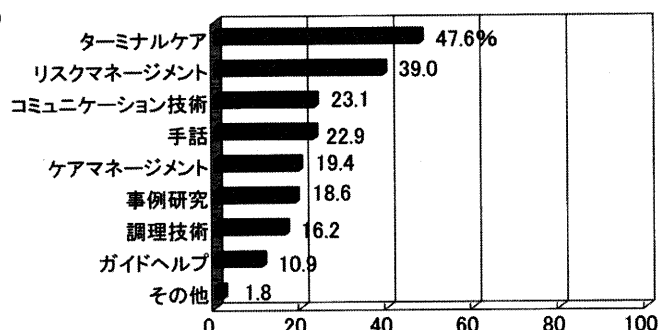


図11 習得したい知識（日常生活の介護技術）

図12 習得したい知識（その他）



4. 考察

(1) 受講者介護技術講習会による意識の変化

介護技術講習会の特徴は、介護の質を高めるために、介護過程の展開を学ぶことにより日々の介護実践は常に介護目標につながっていなければならないことを演習事例にて意識化することにある。また、その人の日々の暮らしや人生を支えることの意義を考え、対人援助技術としてのコミュニケーション能力を高め、根拠のある確かな援助技術を学ぶものである。

今回の講習会では長野県全域で統一した指導の下で行われ、受講生の97%余りが介護に対する意識の変化があったと回答しているのは、介護の質の向上につながるものと思われる。

1) 介護過程の展開の意義と意識の変化

日々実践している介護は、その人の介護目標に基づいて行われていることを意識化することで、マンネリ化した作業的な介護から、個別的な介護に転じることができる。ICFの考え方をとり入れることにより、「人が生きること」をチームとして共通して総合的に把握し、介護過程の展開の基本であることを認識することができる。そして、ICFの理解が、その人の人生や生活を、その人主体で捉えることにつながるということである。

この「人が生きること」での介護の目的は「その人が望んでいる生活ができるように自立に向けて援助する」ことにある。それゆえ「その人の暮らしがある」ことをいつも意識しながら、生活に視点を置くようにと、小池は述べている⁶⁾。また、一番ヶ瀬は、「誰でも生涯を幸せに過ごし、この世を安らかに旅だちたいと思っています。また、どの人にもその人しかありません。誰にもないその人の暮らしを、自由に発揮しながら生き抜くあり方、自立と自己実現の自由を促すこと、それこそが介護の最終目標といえましょう」と語っている⁷⁾。

今回、「介護過程の展開」の講義を初日に行った予定最終日に受講生がそれぞれ事例をもってきて事例検討を行った。初めての受講生が多く、まとめ方に個人差はあったものの、誰もが事例を通し「その人が暮らしの中で、自由に自分らしさを発揮しながら生き抜くあり方、自立と自己実現の自由を促すこと」を目指し取り組んでいくために行われた事例検討であった。そのために受講生8人で210分は、議論が尽きないことが多かった。この「介護過程の展開」によって、受講生の多くが「利用者主体の介護を実践していかなければならないと思った」、「日々の介護実践が一人ひとりの介護目標につながらなければならぬと思った」と意識の変化があり評価できる。私たち指導者にとっても、受講生の現場での抱えている現状や受講生の思いなど多くの学びを得た。今後は、さらに受講生の意識の変化を目指すと共に、受講生がまとめやすい事例の用紙の作成やケア事例検討の人数調整等より充実した内容にすることが課題となる。

2) コミュニケーション技術の意義と意識の変化

介護は対人援助であるゆえに、いかにして利用者に安心感を提供していくのか、そのことをどのように伝えていくのが重要である⁸⁾。また、総ての援助が介護目標につながっていることから、介護者は、会話、利用者と肌と肌、目と目で表情や反応を確認しながら介護技術を提供していくことが大切になる。さらに、その過程において、両者の意思疎通がなされなければならない。よって、よりよい介護を行うために、コミュニケーションは総ての介護技術の土台となりえる。また、中村は、「介護技術の提供そのものがパーソナルコミュニケーションを実践する非言語的コミュニケーション手段として機能する可能性が高い」と述べている⁹⁾。介護実践がよりよいコミュニケーションの機会を提供してくれるというものである。このような意味でこの講習会は、初日にコミュニケーションの技術を行い、終始コミュニケーションを意識した演習を行った。実際、演習では、改めて行うことの難しさや相手を尊重する言葉を用いるぎこちなさがあった。現場経験のある受講生であるため自身で考えることも大切であるので、受講生が演習を行った最後に指導者による模範演技を行うと拍手やため息が出て、コミュニケーションの大切さが実感できたように伺えた。受講生の意識変化の中で「コミュニケーションの重要性が意識された」「相手の意思を尊重していくことが重要であると思った」「言葉遣いが丁寧になった」が高率であり、参考となった単元でも高率であることにより、コミュニケーションの重要性が認識された。今後は、さらに12課題に渡り、バリエーション豊かなコミュニケーション技術を提供できるように研鑽していきたい。

3) 移動の介護の意義と意識の変化

移動の介護は、さまざまな生活行為の基本である。体の動きのメカニズムを理解しなければ、利用者・介護者の負担となる介護や危険・過剰な介護に陥りやすい。そこで、講習会全体に渡り、援助動作一つ一つに原理や原則を示すことで根拠に裏付けられた援助を行うことを強調した。特に移動の動作の指導は、どの演習にも共通するので、原理・原則に即した基本の動作を繰り返し確実にを行った。そのためにも規定の演習内容のほかに、ベッドのギャッジアップの方法、起き上がり、立ち上がり等の基本動作を独自に演習に取り入れるなどの工夫を行った。受講生は、初めて系統的に習う技術を熱心な態度で習得していた。アンケートの結果からも「介護技術はテクニックだけでなく、根拠をもっていなければならないと思った」「基本原則の重

要性がわかった」が高率であった。また、参考になった単元では、「移動の介護」が最高値であり、受講生の意識の変化がみられた。演習では、日ごろ実施している介護からなかなか直らない受講生もいた。研修の機会なく、先輩の動作をまねて実施していた受講生や在宅で誰も相談することなく実施していた受講生にとって、確かな技術を身につけられた機会となった。今後の課題として、限られた時間で多くの基本動作の演習は、受講生全員に十分習得できる時間がとれない。演習方法について検討を重ねていかなければならない。

4) 排泄・衣服の着脱・食事・入浴の介護の意義と意識の変化

排泄・衣服の着脱・食事・入浴の介護については、「介護過程の展開」「コミュニケーション技術」「移動の介護」に比べると参考になった単元では低率であった。少数ではあるが、参考にならなかった単元としてあげている受講生もいた。その原因の一つに、演習内容の適正が挙げられる。例えば「排泄の介護」では、ベッド上での差し込み便器使用の演習であった。受講生にとって、全く用いていない方法で、手技が複雑であり、5分という規定時間ではできるのが難しいものであった。「食事の介護」については、演習の内容がコミュニケーション主体であった。その点においては、テキストが変わらない限り改善できないが、来年度は、いかに意味のある演習にしていけるかが課題として残った。

5) 講習会全体の意義と意識の変化

意識変化の結果から、この介護技術講習会は、受講生にとって単に国家資格取得のための講習会ではなく、自分たちの介護の意識を変えて実践していくという機会としても意義深いといえた。しかし、約20%の受講生が、理想的なことを学んだが、現場に戻ったらとても無理であると回答していた。無理な要因の検討も必要であるが、意識を変化させ、現在の介護からよりよくしていく努力することが重要なことである。今後、この講習会がいつまで続くか国の明確な返答がない中で、毎年講習会を行なうことにより受講修了者が増加するので、介護現場の介護に対する意識変革も期待できる。

(2) 講習会に対する受講生の満足度と今後の課題

講習会に対する受講生の満足度は、「大変満足」、「おおよそ満足」合わせて93.2%に及んだ。自由記載には、「講師の先生方が丁寧・熱心・親切で、不安や疑問に気軽に質問できた。」「基本が学べた。基本の原理原則を学べた。自己選択、自己決定、自立支援の大切さを学んだ。」「根拠の大切さを学んだ。」「コミュニケーションの大切さについて学んだ。」という内容が多かった。講習会では、コミュニケーション技術を強調したことにより、指導者として何よりも受講生を尊重し、丁寧な言葉遣いを自ら示すことが一番大切である。その点においても、受講生の満足感につながったと思われる。また、指導者も受講生の態度から学ぶことが多く、受講生同士が、熱心に演習を行い交流がみられ双方の相乗効果があったことも満足感につながったと思われる³⁾。一方「不満」「やや不満」と記載した受講生の自由記載には、「もう少し演習時間がほしい。」という意欲的な意味での不満という記載が大半を占めていた。しかし、「毎回違う講師で、介護の仕方も少し違い混乱した。指導を統一して欲しかった。」という意見もあり、来年にはもう一度、研修会を行い、認識・手技の統一を図っていくことが必要であ

る。また、どの手技にも根拠をもって実施することの重要性を受験生が認識するために、指導者として根拠や発展性を示唆することで、受講生が単に事例演習の手順にこだわることがないように指導に当たる必要がある。少数意見ではあるが「一日の中で事例が多すぎる。スケジュールがハードである。」「4人に1人の講師がいれば良かった。」という意見があった。確かに、9時～18時までの8時間を集中して行うことはかなり大変なことである。実施している私たちでさえかなりの疲労である。しかし、養成校として、何日間も講習会を開催できないこともあり、来年も4日間で実施する予定である。若干、夏休み中の連日が少なくなり、土曜日毎の週1回の日程が多くなっているため、少しは改善されていると思われる。

「少人数に1人の講師がほしい」という意見に対しては、指導者でもその方がよいと感じているために、来年度からは1人指導者を多くした体制で実施できるように計画している段階である。より細やかに個別的に指導できる体制づくりを目指していきたい。

受講生が習得したい知識は、「病気と症状」が多かった。これは、日本介護福祉士養成施設協会調査研究委員会が2005年3月に報告した「特別養護老人ホーム職員調査研究報告書」の中でも、約60%の職員が「医学の知識」を学びたいと他項目より高率で回答していた。¹⁰⁾ また、「認知症」については、利用者が増加しているために習得したい知識として高率を占めている。さらに「ターミナルケア」「リスクマネジメント」への関心も高いことがわかった。介護技術講習会では、基礎的なことにウエイトをかけているので、これらは、介護福祉士資格取得後に介護福祉士会の行う研修等を受講することを期待している。資格後の研修の必要性について、長野県では、養成校と介護福祉士会の連携で行われているので、今後の継続研修は介護福祉士会に期待したい。

5. 結論

介護技術講習会は、県単位での組織作りから始まり、指導者として統一した手技や認識を同じくするように研修会を重ねて臨んだ講習会が終了した。

受講生からの意識の変化から、今回の講習会の評価がなされた。

介護過程の展開では、ICFの考え方を導入し、受講生に日々の介護実践が一人ひとりの介護目標につながらなければならないと意識付けできた。その人の人生や生活を、その人主体で捉える重要性が認識できた。

コミュニケーション技術では、演習全課題にコミュニケーション技術を意識的にを行い、利用者の意思の確認や説明を行なうことや視線の位置に至るまでを指導のポイントとし、強調したことから、受講生がコミュニケーションの重要性が意識できた。

移動の介護等の講義・演習では、介護技術は手技だけでなく、根拠をもっていなければならないと意識付けができた。動作一つ一つに根拠付けをし、指導した結果、受講生の意識化につながった。

以上の意識の変化から、ねらいはおおむね達成できた。また、講習会全体を通しての満足感は、93.2%に及んだ。指導者の姿勢も評価された。

一方では、講習会で学んだことを約20%の受講生が、現場に戻ったら無理であると感じていた。しかし、現場の質の向上は、この介護技術講習会修了者が増加していくことにより期待できる。

今後の課題として、さらに研修を重ねより質の高い介護技術講習会を行っていくこと、講習会の体制を見直し、より細やかな指導体制をとれるようにすること。養成校と介護福祉士会の連携したことで、受講者の今後の継続研修につなげていくことなどが考えられた。

6. おわりに

介護技術講習会は、初年度であったため、組織作りから指導案作り、講習会の運営等手探り状態で始まった。また、受講生申込数や受講生の実態も全くわからない状態でもあった。その中で、研修会を重ね、手技を統一し認識を確認したことがこの講習会の成果につながったと考えられる。さらに、どの会場も受講生は、熱心で指導者も受講生の態度から学ぶことが多かったことも講習会の成果である。今後、より質の高い介護技術講習会を行うために自己研鑽を積み重ねていく必要性を感じた。

最後に、この講習会開催にあたり、気持ちよく協力をいただいた各養成校の教員、介護福祉士会の方々、松本短期大学の職員の皆様に陳謝いたします。

参考文献

- 1) 平成17年度第2回総会資料；介護福祉士登録者集計（社会福祉新興・試験センター提供）
p 19. 2005.
- 2) 厚生労働省・援護局長；社会福祉士及び介護福祉士法施行規則の一部を改正について（通知）；社援発第1019004号；2004. 10. 19
- 3) 尾台安子；「長野県介護技術講習会への取り組みと今後の課題」；松本短期大学紀要；2005
- 4) 石橋真二他；「介護技術講習会指導者マニュアル」；社会福祉振興・試験センター；2004. 9
- 5) 厚生労働省・援護局長；社会福祉士及び介護福祉士法施行規則の一部を改正について（通知）；社援発第1019004号別添2；2004. 10. 19
- 6) 小池妙子；「生活の概念と要生活者の生活環境」、介護福祉；社会福祉振興・試験センター2005冬期号NO. 60 p 7
- 7) 澤田信子；「生活世界における自己実現」介護福祉；社会福祉振興・試験センター2005冬期号NO. 60 p 28
- 8) 井上敏機；「ICF介護実践読本」日総研；2005 p 37
- 9) 中村裕子；「介護福祉に必要なコミュニケーション技術の系統的実践に向けて」介護教育；日本介護福祉士養成施設協会 2005. 3 NO. 19 p 23
- 10) 日本介護福祉士養成施設協会調査研究委員会；「特別養護老人ホーム職員調査研究報告書」日本介護福祉士養成施設協会調査研究編；2005. 3 p 71